

小児生活習慣病血圧基準値について

(■日本高血圧学会高血圧治療GL2019(JSH2019)作成委員会／ガイドライン 参照)

1) 血圧測定

高血圧の診断には、的確な血圧測定が不可欠である。座位か臥位で、幼児は保護者の膝に抱いてもらい測定する。小児の血圧測定は適切なサイズのマンシェットを選択することが大切で、3歳以上6歳未満は7cm幅、6歳以上9歳未満は9cm幅、9歳以上は12cm幅(成人用)のものが市販されている。ただし、年齢より上腕周囲長や体格に合わせたほうがよく、ゴム囊の幅が上腕周囲長の40%を超え、長さが上腕周囲を80%以上取り囲むものを選ぶ。

2) 健診用基準

小児の高血圧基準値は、米国では聴診法に基づき、性、年齢、身長別に細かく定められている。一方、本邦では小児の血圧に関する報告は乏しくJSH2014ではオシロメトリック法による自動血圧計を使用した一般的な血圧健診で得られたデータをもとに高血圧基準を定め、JSH2019でもこの基準値を小児の高血圧基準とした(表11-1)。(公財)東京都予防医学協会が測定した全国約4万人の小中学生の血圧値を解析すると、この基準値による高血圧出現率は過去の報告とほぼ一致しており、各地で行われている血圧健診の判定に有用かつ妥協性のある基準値といえる。

表11-1. 小児の年代別、性別高血圧基準

	収縮期血圧	拡張期血圧
	(mmHg)	(mmHg)
幼児	≥ 120	≥ 70
小学校		
低学年	≥ 130	≥ 80
高学年	≥ 135	≥ 80
中学校		
男子	≥ 140	≥ 85
女子	≥ 135	≥ 80
高等学校	≥ 140	≥ 85

JSH2019の高血圧基準と同じ。

3) 血圧管理用基準

基準値作成には、信頼できる血圧測定であることを前提に、年齢ごとの血圧値が示されている必要がある。これに合致する血圧健診から導き出された高血圧基準(95パーセンタイル値)を表11-2に示す。

十分な安静と静粛な環境のもとで、上腕周囲長の40%以上になる幅のカフを用い、自動血圧計により3回連続測定し、3回目の記録を採用している。この管理用基準値は、健診用基準より10-15mmHg低い。

糖尿病や慢性腎臓病(CKD)などの基礎疾患があり、血圧を厳密に管理する必要がある小児では、表11-2の管理用基準を用いるのが望ましい。

高校生は、自動血圧計で3回測定した2回目、3回目の平均値を採用し、収縮期血圧は94パーセンタイル値、拡張期血圧は男子91パーセンタイル値、女子95パーセンタイル値を高血圧基準値とした報告では、男子135/75mmHg、女子120/75mmHgであった。従来報告よりかなり低い、対象が生活習慣病に関心をもつボランティアであり、BMIが30以上の者を除外している点を考慮する必要がある。

表11-2. 血圧管理用の高血圧基準(mmHg)

学年		男子		女子	
		収縮期	拡張期	収縮期	拡張期
小学校	1年	107	60	108	60
	2年	112	63	108	60
	3年	114	62	111	61
	4年	116	63	121	66
	5年	117	63	119	66
	6年	119	63	119	65
中学校	1年	125	66	126	68
	2年	130	66	126	68
	3年	136	68	128	70

平均身長での基準に相当し、身長が高い(低い)場合は基準値も高く(低く)なる。